

【資料2】

平成22年度 唐津市立西唐津小学校 学校評価結果

1 学校教育目標 自ら学び、自信に満ちた児童の育成
------------------------------

総括的な教育目標を、より具体的な児童生徒や教師、学校の「姿」としてイメージする

2 学校経営ビジョン いつも にこにこ笑顔で しっかり聞いて かんがえる はつらつ にしからつっ子	<p style="text-align: center;"><b>学校三原則</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 礼を正す</li> <li>・ 時を守る</li> </ul>
--	--

- <めざす学校像> ・生き生きとした活力ある学校
- <めざす学校像> ・一人ひとりが生かされ、学び合いのある学校
- <めざす学校像> ・地域に開かれ、信頼される学校
- <めざす教師像> ・しっかりと子どもを見つめ、信念を持って導く教師
- <めざす教師像> ・人間性豊かで夢を語る教師
- <めざす教師像> ・使命感に燃え、創意工夫した教育活動を実践する教師
- <めざす児童像> ・心豊かで思いやりのある子

このうち、特に今年度力を入れるものを絞り込む  
 絞り込むに当たって、特に、前年度、「何ができて、何ができなかったか」を参考にする

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
<p>①進んであいさつができる児童を育成する。</p> <p>②深く考え、正しく判断し、自ら高まっていく児童を育成する。</p> <p>③豊かな心を持ち、励ましながら頑張る児童を育成する。</p> <p>④健康で、最後までやりとげる児童を育成する。</p>	<p>&lt;成果&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「あいさつ運動」の実施により、元気にあいさつする児童が、保護者アンケートで80%となった。しかし、地域格差もあるので、さらに取組を広げていく必要がある。</li> <li>・ 昨年度、唐津市の教育の日(授業参観)に一斉の道徳授業を行い「命」の教育に取り組んだ。保護者からも高い評価を得た。今年度も保護者・地域に公開し、心の教育推進に努める。</li> <li>・ 行事や教科等において、地域の教育力を有効に活用し、地域との交流ができ、学校の財産ができた。</li> </ul> <p>&lt;課題&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 学力向上の基礎となる意欲を高めるために、学習・生活等あらゆる場面でほめ、自己肯定感を持たせる必要がある。</li> <li>② 校区全体を巻き込んだ安全体制づくりを工夫する。</li> <li>③ 学校からの情報発信を丁寧に行い、保護者の子育て・教育に関心度を上げていく必要がある。</li> </ul>

絞り込んだ重点目標の成果や課題を具体的に評価するためには、どのような項目や指標を盛り込むべきかを考える

5 総括表						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	評価及びその理由	具体的方策	成果と課題
学校運営	○学校経営方針	教育目標、本年度重点目標の周知	・教職員・児童・保護者・地域住民に周知する。認知者を90%以上にする。	C 本年度教育目標が変わったこともあり、認知者90%には至らなかった。	・職員会議、全校朝会で説明する。 ・PTA総会、保護者会、学校便り等で説明する。 ・地域には、各種団体の会議等で説明する。また、公民館を通じて学校便りを配布し、周知する。	学校便りを定期的に出し、地域行事や地域役員会で学校の現状や連携を訴えることで、学校としてのスタンスは保護者や地域の方に理解いただいているように感じる。さらに機会あることいろんな場所や会議において、経営方針内容や教育目標等を説明し、周知できるよう学校運営に努力する必要がある。
	○教職員の資質向上	校内研究の充実、学年・学級経営の充実	・指導技術がさらに向上したと感ずる教職員が90%以上をめざす。 ・学級経営の自己評価での達成率を85%以上にする。	B 基本的な生活習慣の定着については90%以上の教師が達成感を感じているが、校内研については、国語の研究1年目ということで、実践に物足りなさが残った。	・学年グループの研究授業を行う。 ・研究会に参加し、学んだ指導理論や技術を報告する。 ・経営案に沿っての実践と学期ごとの自己評価を行う。	基本的な学習習慣を定着させるための「きんぼし学習週間」の全校的な取組により、学校全体が落ち着いてきている。国語の校内研として、全校的なものや系統的なものに取り組むことで、児童の基礎学力をさらに充実させたい。
	○危機管理体制の整備	・保護者・地域との連携 ・危機管理体制の整備	・「危機管理マニュアル」を再検討し、緊急体制と連携システムの内容の実効性を図るなど職員役割を明確にする。 ・避難指示の放送より、5分以内に指定場所へ安全に避難する。 ・自己防衛能力を高めるための避難訓練の実施。	A 始業式前日の悲しい事故を受け、職員や保護者が危機管理について敏感に対応するようになった。	・マニュアルに沿った避難訓練(風水・地震・不審者)を実施する。 ・全校朝会(生活)で、不審者等からの身の守り方を話し、児童の意識を高揚させる。 ・効率的な「緊急連絡システム」を構築する。 ・安全点検と共に日々の安全・安心へのきめ細かな気配りをする。	不審者事案が数件発生したが、子どもたちは適切な対応ができていた。警察や地域見守りコーディネーターへの連絡体制も確立されている。道具がだいぶ老朽化してきたので、点検・修理をしっかり行いたい。
	○開かれた学校づくり	・保護者、地域等との連携	・参観日や学校公開日などの来校者を年間保護者のべ2千名以上、地域は、年間200名以上にする。	A 本年度は、小中合同バザーや学習発表会などの行事も全て開催することができ来校者も多かった。	・学校評議員会、民生委員会の地区の会議や地区懇談会等に参加する。 ・保護者ばかりでなく、評議員、民生委員等に対して学校に関する情報を発信し、連携を深める。 ・参観後のアンケートを活用し、今後の学校経営に生かして改善を図る。	学校から情報を発信するだけでなく、地域からも情報や依頼ををいただき、種苗協会の食育プロジェクトや地域の交通安全運動、虹ノ松原保全運動などに取り組むことができた。また、安全マップも地域とともに作り上げることができ、西唐津校区のマップとして出来上がった。児童に無理がないようには活動を広げていきたい。
	○校種間連携	小・中連携の推進 保・小連携の推進	・児童、職員間の交流を行う。(中学校で授業を行なう) ・幼小中の系統性のある生活習慣の確立。	B 中学校とは合同研修会を開き、9年間を見通した教育を考へることができている。保小連携の部分が弱かった。	・基本的な生活及び学習習慣の共通理解を図る。 ・生徒指導上の情報交換や指導の共通化を図る。 ・「早ね、早起き、朝ごはん」の習慣化を図ると共に保護者へ啓発をする。	中学校と合同でQUESTの研修会を開き、西唐津校区の子どもの実態を把握することができた。このことを踏まえ、今後の指導に役立てていきたい。保育園とは、夏休み等を中心に相互交流の機会を増やし、情報交換の場を増やしていきたい。
教育活動	●学力向上	・学習プリント配信システムの有効活用 ・学習意欲の向上と基礎的・基本的な学力の定着 ・TT、少人数授業による個に対応した授業の実施。 ・「話す」「聞く」を核とした国語科の校内研究によるわかる授業の実施。	・学習プリント配信システムを全学級が利用する。 ・CRT検査において、各教科のポイントを前年度より、全学年1～2ポイント上げる。 ・よき話し手、よい聞き手となるための基礎的指導の研究指導の研究を行う。	B CRT検査の結果、国算とも昨年とほぼ同じ正答率であった。市内平均と比較すると、昨年より相対的には正答率はわずかに下がった。しかし、評定の割合を見ると、国算とも「評定3」がそれぞれ24%、5.2%あがっている。	・利用についての研修会を行い、児童の実態に合わせた学習プリントづくりができるようにする。 ・校内研究と連動した授業づくりを工夫する。 ・国語科の研究を通して、他教科と関連つけた教育効果をねらう。 ・朝の時間を利用したチャレンジタイムにおいて、プリント等による繰り返し学習を行うことで、基礎的学習内容の定着を図る。	様々な検査等の分析を職員全体で研修し、本校児童に必要なことについての共通認識を持った。学力向上に向けて、それぞれの学年で具体的に実践していることを共有し、指導改善の一助としたい。学習の基本となる事項について、さらに組織的な意識をもって取り組む必要がある。

	●心の教育	・「道徳」教育の充実 ・緑化活動や小動物などの飼育活動の充実。 ・集会を通して、「心の教育」の推進	・「ふれあい道徳教育」を教育の日に全校一斉授業を公開し、道徳教育の充実を図る。 ・花の栽培や飼育活動を通して、豊かな心を養うと共にボランティア活動を活性化させる。	A	4月の事故を受け、全職員があらゆる活動の中で「命」にこだわって指導を行った。	・「命」に関わる授業をより重視し、保護者や地域の人と共有する。 ・「ハートフル集会」で、児童に豊かな心を育む。	自分の命を大切にだけでなく、人の命を大切にするために自分たちに何ができるかを考え、東北大震災の被災者のために自主的に募金活動をする姿が見られた。しかし、公共心という部分ではさらに心を耕していく必要がある。
	●健康・体づくり	・たくましい体力、気力の育成	・日常の遊びや運動を通して、たくましい体力、気力を養う。	B	外遊びの奨励により、朝や昼休みなど外で遊ぶ児童が増えてきている。	・授業中の姿勢に気を付けさせる。 ・外遊びを奨励。	クラス対抗の「きんほしカップ」については、クラスのまとまりが強くなり、体力だけでなく、みんなで協力して頑張ろうという気力も高めることができた。運動能力テストの結果の分析から、伸ばしたい能力を分析し、体育の授業にも取り入れていく必要がある。
		・食教育の推進	・給食指導を充実し、望ましい食習慣の形成を図る。 ・給食を残さず食べる児童95%をめざす。また、食に感謝する態度を育てる。	A	アレルギーによる除去食が必要な児童はいるものの、概ねおいしく給食を食べている児童が多い。	・「食育」の授業実践を計画的に実施し、食の大切さに気付かせる。 ・食の大切さについて保護者に啓発する。	給食の食べ残しは殆どなく、子ども達の食に対する関心は高い。級外による給食準備(身支度)や後片付けの指導の結果、昨年度に比べるとかなり改善された。
	○小中連携	・系統性のある生活習慣・授業規律を確立する。 ・定期的・計画的な合同研修の実施	・小中連携を意識したアクションプランを作成し、9年間のスパンを見通した系統性ある指導を行う。 ・担当者が連絡を密に取り合い、実効性のある研修会となるようにする。	B	定期的な合同研修会を開くことで共通理解が深まった。	小中合同研修会の中で、共通理解を図り、共通の意識を持って児童・生徒の指導に臨む。	これまで、それぞれの立場での情報交換が行われ、校種の壁というものが感じられていたが、合同Q-Uテスト研修会等を通じて、同じ視点での児童・生徒理解ができたように感じる。個別の支援を要する子どもが多いので、早い段階からの情報共有を行って生きたい。
	○教育相談及び生徒指導の充実	・児童理解のための校内研修の実施 ・不登校児童対策 ・「気になる子」への支援 ・Q-Uテストの有効活用	・問題行動等の発生件数を前年度より減少させる。 ・不登校傾向の児童の早期発見に努める。 ・全校児童の中で、教育相談的に配慮を要する児童の共通理解をし、全校的な支援体制のもとに支援していく。 ・Q-Uテストの結果を分析し、児童のよりよい学校生活にいかす。	A	生活面・学習面の落ち着きと共に問題行動の数が減ってきている。	教育相談部会や生活指導協議会で情報交換を行ない、個々の児童について共通理解を図ると共に、より具体的な対応を協議する。 ・児童の健全育成のため、保護者の協力(家庭力)を得ると共に地域の協力(地域力)も得る。	教育相談担当・生活指導主任・SCを中心に、青少年支援センター・SSWへのつなぎも行いながら「早期対応・根拠強い対応・みんなに対応」を心がけたことで、課題を抱える児童や保護者に対し、様々な角度からの支援ができた。次年度への引継ぎをしっかり行うことで、継続支援ができるようにしたい。
	○学校図書館教育	・読書指導の推進	・学年ごとの目標読書冊数に到達した児童が85%以上にする。 ・「国民読書年」コーナーの設置による読書活動の推進。	A	目標読書冊数に到達した児童が87%であった。イベントの開催で図書館を利用する児童が増加した。	・読み聞かせボランティアとの連携を図りながら、朝の読書タイムを活性化し、読書への関心を高める。	図書館祭や図書委員会の取組により、図書館の利用率と本の貸出冊数が伸びた。また、保護者ボランティア・教師による朝の読み聞かせの時間は、児童も楽しみにしており継続していきたい。
特定課題	●小学校低学年の学習環境の改善充実	・指導法改善による学習習慣・生活習慣の育成	・学習習慣・生活習慣の指導を繰り返し、90%以上の児童が身に付くようにする。 ・特別支援教育の視点に立った児童理解・児童対応の実施。	B	年度末の担当教諭への小低のアンケートでは5割程度が十分満足できるという結果になっている。	・生活習慣や学習習慣を身に付けるためには、児童にも自己評価を行わせ、意識化させる。 ・アンケートや便りなどを通して、家庭との連携を図る。 ・学習形態を工夫し、児童が集中して話を聞いたり、考えを伝えたりできるようにする。	生活支援員や級外など複数の教員の目で温かく見守り、指導・支援をしていくことで、落ち着いて生活・学習ができるようになってきた。今後も中・高学年で崩れることのないよう継続的・系統的指導を続けていく必要がある。
	○指導方法の改善	・有効性のある少人数指導やTT指導の充実 ・児童の授業満足度を高める。	・学習目標に応じて少人数やTTによる学習を取り入れ、各教科・領域で基礎・基本の定着を図る。 ・児童アンケート「TT授業や少人数授業の勉強は好きですか」で50%以上の児童が「好き」と回答が得られるようにす	B	学年の実態に合った形態を取り入れ、特に理科の授業で成果があり、児童の満足度も上がった。	・複数の指導担当者による指導内容や方法の工夫・改善を継続して行い、児童一人ひとりにきめ細かく対応していく。 ・児童の実態に応じて授業形態を工夫する。	TT担当が積極的に学級担任とコミュニケーションを取ったことで、学習の流れがスムーズにいった。新学習指導要領に基づいた教育課程を計画していく中で、全教科・領域において各職員の個性・特技を活かした指導方法の工夫を行っていきたい。
	○特別支援教育	児童理解の深化	・児童の状況の共有化を行い、児童支援に努める。 ・「校内支援体制」の構築を図る。	A	児童理解研修会や生活指導協議会の中で児童への指導・支援について共通理解を図ることができた。	・定期的な情報交換を充実させる。 ・複数の職員による児童観察・理解に努める。	特別支援教育の視点での協議会をもつことで、「個別の支援計画」を基に個に対応した指導の共通理解を全職員で図ることができた。今後、その児童を他の児童にどう受け入れさせるかについて研修を深めていく必要がある。

評価結果を踏まえて、「何ができて、何ができなかったのか」を考える  
特に、C、D評価はもとより、A、B評価も、「評価項目として適切だったのか」は吟味の余地がある

6	総合評価	○本年度は、学校教育目標が新しく変わった1年目ということで認知度は低かった。○学力向上においては、国語科の校内研究の取組が初年度ということで、手探りの状態で様々な取組を行った。スーパーティーチャーを招聘し理論研・模範授業を行っていただいたことで、来年度の方向性が見えてきた。一方、新学習指導要領における学力の3大要素の一つである「意欲」に課題があることも教師が感じているので、褒めて伸ばす取組を続けている。○児童・教師間共に「3つのあ」を実践した。生活の基本である「挨拶」「安全」「後片付け」を合言葉に指導し、着実に成果が上がってきている。今後も継続して指導を続けたい。特に、「安全」については、4月の悲しい事故を受け、水難事故防止教室や交通教室の中で自己防衛力をあげる指導を行い、二度と悲しい事故が起こらないよう力を入れてきた。
---	------	---

「できなかった点」について、次年度以降の具体策を検討する  
「できなかった」こと自体よりも、改善策を見出せるかが重要である

7	来年度の改善策	○情報発信については、学校だより・学級だより・地域での会議だけでなく学校情報連絡サイトやHP等の内容を充実させ、継続発信・迅速発信を心掛けたい。○学力向上については、新教育課程完全実施で学び残し、学び漏れがないように、職員全員で共通理解を図りながら指導にあたり、基礎学力の定着、思考力・判断力・表現力の向上に努めたい。さらに、児童が「楽しい、やりたい」と思うような魅力ある教育課程の編成に努めたい。○心の教育では、達成感・自己肯定感が高まるような教育活動を行うとともに、地域の宝として地域から「ありがとう」をたくさん言ってもらえる教育活動を展開したい。
---	---------	--

●は共通評価項目、○は独自評価項目